

季刊

1995年10月20日発行 第19卷 第4号 通巻74号  
ISSN 0389-0333

# 民族学

国立民族学博物館 監修

74

1995 秋





# イルカ漁の1日

狩猟の正体あるいは幸福をめぐって

たけかわ だいすけ  
竹川大介  
(国立民族学博物館非常勤研究員)

ついにイルカが追いこまれた。村  
じゅうのカヌーが海上にならぶ



沖合二〇キロ以上、  
小さな丸木のカヌー  
が散開する。ソロモ  
ン諸島マライタ島で  
は、イルカの群れを  
海中でうち鳴らす石  
の音で追いこみ、村  
の前の入り江までよ  
びこむ。集団イルカ  
漁の一日に参加し、  
狩猟における自然と  
人間の関係を考える



↑人口わずか170人ほどのファナレイ村。サゴヤシの葉でふかれた高床式の家いえでは、電気もガスも使わない静かな生活が営まれている

→写真奥の細長い砂州の上に、ファナレイ村がみえる。イルカ漁のクライマックスには、マングローブ林がおおう写真手前の小さな湾に、イルカの群れが追いこまれる





屋根をふくためのサゴヤシの葉を編む村の老人



寄合小屋の屋根の上のつた男たちが、板状に編まれたサゴヤシの葉を、魚を釣るときのように引きあげる→毎年、魚のシーズンははじまる前に、村びとの共同作業で寄合小屋の修理がおこなわれる

朝、といってもまだ暗い。少しかけはじめた月が夜のなごりを残しながらそろそろ西に沈みかけている。村はひっそりと寝静まっているが、わたしはひとり暗い部屋のなかで浅い眠りからさめた。もうブグが鳴るはずだ。ブグというのは大きなトウカムリガイでつくられた法螺だ。人が死んだときや村びとを集めたりするときに吹き鳴らされる。イルカ漁の季節は、漁に出る男たちを起こすために村じゅうに響く。

**黎明のとき、集団漁の人の和が熟成されていく**

今年、ブグを吹く役に任命されたのはテンガリアの息子のガニフィリーだ。テンガリアはここファナレイ村のリーダー格の漁師であり、ガニフィリーもその血をひいているように、漁に関しては村の若者のなかでも一目置かれている。ただ根がいいかげんな男で、だいたいいんにおいておどろばなものが困りものだ。それに短気だ。つい最近も、怒って自分の妻の腕に鉈をつきさすという事件を起こしたばかりである。ガニフィリーの妻は若くておとなしい人だ。ふたりの子どもの目の前で、ガニフィリーはなにに腹を立てたのか、おとなげもなく妻に当たりちらしたのだという。三〇歳を少しすぎたガニフィリーを評して村びとはいう、「あいつはまだ青いね」。

空が黒から濃紺に変わり、ニワトリが鳴くころになってようやくブグの音が聞こえた。ガニフィリーはききょうも少し寝坊をしたようだ。いいやつなのだけど、やはり、おどろばなののである。

ブグの音に起こされて、男たちが眠い目をこすりながら寄合小屋に集まってくる。だが、こうした場合でもときばきとことが進むわけではない。だからと無為に時間が過ぎていくのが村の日常だ。人びとはこれを自嘲して

「ソロモンタイム」とよぶ。南の島の時間は壺からあふれだす蜂蜜のように、ねっとりと呼ばれる。村の一番端から寄合小屋まで五分とかならないのに、全員が集まるには一時間くらいみておいたほうがよい。

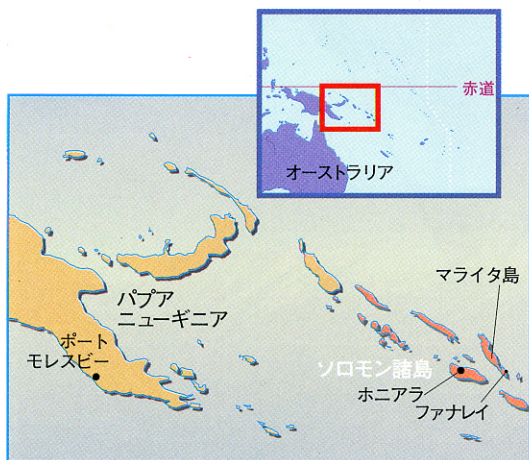
このごろではわたしもすっかりソロモンタイムにそまっていた。早く行っても待たされるのはわかりきっている。タイムリングを見計らって床を抜けだし、寄合小屋に向かう。なかにはすでに一〇人ほどの男が集まっていた。早くききょうでもういちど眠り直している人もいれば、寝起きのタバコで冷えた肺を暖めている人もいる。暗い小屋のなかでいくつもの赤い火が光っている。

あらかた人が集まったところで祈りがはじまった。聖書の言葉が静かに唱えられる。むかしは海の魔神に祈っていたが、いまはイエス・キリストとその神に祈る。しかし祈りの大切さは変わらない。村びとはいう。「人間の力だけでは漁は成功しない、イルカを村の前の浜まで連れてくるためには、人間を越えたものの力を借りなければならぬ」。イルカを村によぶ力。村の生活は、目にも見えないさまざまな力によって支配されている。薄暗い小屋につどい一心に祈るうちに、わたしの心の中にも、イルカ漁にもっとも大切な人の和が熟成されていくような、不思議な思いが満ちてきた。

「アーメン」

合槌を打つように唱和する。祈りのあとのほんの短い打ち合わせが終わると、あっけないほど早くその集まりは終了した。男たちはぞろぞろと家に戻り、漁の準備をする。

海はまだ暗い。イルカは夜のうちに沿岸に近づき餌を探すので、日の昇る前にカヌーで海に出て、岸の近くから外洋に戻っていくイルカをみつけるのがもっとも理想的であると



ソロモン諸島は、パプアニューギニア東部の太平洋地域に位置する独立国で、多数の島嶼から構成されている。人口は約28.5万人で、国民の92.4パーセントがメラネシア人である。マライタ島は首都ホニアラのあるガダルカナル島の東に位置する

いう。きょうは朝方に潮がみちはじめるから時期としても絶好だ。  
よそものの参加資格をめぐる、  
微妙な問題

わたしもふたたび家に戻り、前日のうちに石焼きで調理されたタロイモと水筒の水、カヌーを漕ぐためのパドルを手にとると、浜に出てバレを待った。バレは三二歳の気さくな男で、一番の友人だ。「いっしょにイルカ漁に参加して外洋に出たい」というわたしのわがままを、かれが引き受けてくれた。

よそものであるわたしがイルカ漁に参加するには、微妙な問題があった。

イルカの歯は、ソロモン諸島一帯でお金の代用品として流通し、結婚の際の結納の品としても非常に貴重な財であるとされている。もちろんこうした財だけではなく、イルカの肉はすぐれたタンパク源としても重要である。かつてマライタ島にはイルカ漁をおこなう村が数カ所あったという。しかし、そのほとんどがすでにイルカ漁の技術を失ってしまっている。その原因として、一九世紀後半からこの地域に布教を開始したキリスト教がイルカ漁を禁止したことや、近代貨幣経済の浸透にともない、若者が都市部に流出し共同体の結束が弱まったことなどが考えられる。

幸か不幸か、交通の発達が悪く開発が遅れたマライタ島南部に位置するファンレイ村は、比較的貨幣経済の影響が少なかった。また村出身の牧師の尽力により、キリストのおし

えのもとでイルカをとるという、あたらしい漁の解釈をうちたてた。こうしてわずか一七〇人ほどの小さなファンレイ村が、沖繩本島の三倍以上の大きさをもち八万人の人口を抱えているマライタ島における、イルカ漁の中心地となっているのである。

すでにイルカ漁の技術が失われてしまったほかの村びとは、機会があればファンレイ村の人びとといっしょに漁に出て、分け前をほしいと思っているし、できればイルカ漁の技術を学びなおしたいと考えている。以前はファンレイ村の人びとも、季節的にやってくる漁師たちをうけいれたり、逆に技術指導にむき、各地でイルカ漁を再興したこともあったらしい。しかしこのころは、イルカ漁が独占的な技術であるという意識が高まり、特別な理由がないかぎり、よその村の漁師はイルカ漁に参加できないことになっている。

潜水漁や釣りならば何の問題もないが、イルカ漁は特別な漁である。イルカ漁に参加したいというわたしの希望に対し、どういう扱いにするかでちよつとした話し合いがもたれた。たとえ日本からきた人間であっても、ファンレイ村にずっと住んでいるという点では、よその村の人間とはことなっている。わたしのような立場はとりあえず前例がなかった。

結局、わたしは「父親のカヌーにいっしょに乗ってついていく、漁の経験の浅い子ども」という身分で漁に参加できることになった。しかし漁を手伝うことにはちがいないし、すでに結婚しているという点から、妻の首飾りをつくるために、一人前に準じたイルカの歯の分け前をあたえよう」というありがたいお言葉もいただいた。

こうしたいきさつで、父親がわりの世話役を引き受けてくれたのが、友人のバレであった。さて話を進めよう。



↑岸に近づいた小さなアジを追いこむ

←弓矢漁。磯にたち、波打ちぎわの魚をねらう



### ファンレイ村の漁撈活動

ソロモン諸島マライタ島に住む人びとは、使用する言語のちがいがらおおきく二の集団にわかれていく。そのなかでもラウ語を話す人びとは、海岸部や礁湖のなかに村をつくり、すぐれた漁撈民として知られている。

ファンレイ村もまたラウの人びとの分村のひとつであり、貿易風が卓越しイルカ漁をおこなわない季節には、沿岸海域でさまざまな漁をおこなっている。ヤシの葉を利用した集団追いこみ漁、四手網漁、釣り、潜水漁、弓矢漁など、

かれらの漁は多様性に富み、環境条件や獲物対象に応じて、三〇種を超える漁法を確認することができた。そのなかには現在ではほとんどおこなわれないが、クモの巣と風を利用したタツ漁のように、この地域に特有な漁法もみられる。

本文で述べたイルカ漁も、かれらがおこなっている数おおくの漁法のうちのひとつとして位置づけることができる。海という環境に適応したラウの人びとは、ほとんど土地をもたず漁撈に特化した生活形態をもつ。こうしたかれらの生活は、一方で、焼畑農耕民である山の民との恒常的な交易によってなっていた。

## 約束された時間、イルカがやってくる

しばらく待つとバレはやってきた。われわれが使うカヌーは、人から借りた三人乗りの大きなものだ。とても安定のいいカヌーのだが、重くて船足が遅いのが難点だ。しかも漕ぎ手のひとりはけっして力強いとはいえないわたくしである。

カヌーのなかにたまっている水を汲みだすと、われわれはまだ暗い海に漕ぎだした。現在フアナレイ村で使われているカヌーは、長さが五メートルほどのくり船が主流となっている。アウトリガーのような船体をささえる浮き木もなければ帆もついていない、いわゆる丸木舟である。村にはほかに船外機をついたボートが四台ほどあるのだが、ガソリン代もばかにならないし、エンジン音でイルカが逃げてしまうのでイルカ漁に使われることはない。

村の人びとにとってカヌーはきわめて日常的な乗りものである。サンゴが集まってできた小さな砂洲の上にあるフアナレイ村は、まわりを海にかこまれ、村を出てどこに行くにもカヌーが必要である。しかし、海で生活するものにとつてこれほど便利な道具はない。カヌーさえあればひとりで一〇〇キログラムをこえる荷物を運ぶことだってできる。村では、男も女も老人も、やつと歩けるようになったくらいの子どもさえも、カヌーを巧みにあやつり海を渡る。

ふたりの乗ったカヌーは静かに水の上を滑りだす。暗くてよくみえないけれども、まわりには何ぞうものカヌーがおなじように漕ぎだしているようだ。赤い光が星のように海の上に並んでいる。男たちの活力の素、タバコの花だ。となりのカヌーはみえないが、時々聞こえる櫂の音で、船団になつてともに海の

腹の上を進んでいるのが感じられる。船団、

このこちよい一体感にわたしはうれしくなつてしまふ。外洋へ外洋へ。風なく波もない穏やかな海はカヌーの船団をすいこんでいく。

イルカ漁の時期には東から吹く貿易風が止まり、村の沖の海は風がつかづく。それは、一月から五月までの短い季節である。海が静かになるとイルカたちが島に近づく。毎年繰り返される、フアナレイ村の人びとにだけに約束された時間だ。だからこの時期になると、

イルカを迎えにいくために、男たちは毎日ほるか沖の海に出かけなければならない。村の人びとはしばしば「イルカがやってくる」といういい方をする。「イルカをとりに行く」のではない。

「りこうなイルカはちゃんと村までやってくるけど、バカなイルカは途中で逃げてしまふよ」

ふつうに考えれば、危険を感じて追いかみの困いのなから逃げだすイルカのほうが賢い気がする。村びとの考え方はわれわれとはちがっている。しかし、だれでも村に住むうちに、かれらのいつている意味が「わかる」ようになるはずだ。イルカは本来村にやってくるものであり、村にやつてこないイルカは、何かがちがっているのだ、ひねっているのだ、不良イルカなのだ。まるでどこかの国の中学



深夜の釣りでとれたハタの仲間とフエダイの仲間

→ヤシの葉を利用した集団追いこみ漁で漁獲されたサンゴ礁の魚たち



イルカの歯はソロモン諸島一帯で貴重な財貨として流通している。貝のビーズとイルカの歯でつくられた装飾品を身にまとう、ファナレイ村の娘

気ならばとどん沖に出てもかまわない。

イルカ漁ではもち場によってカヌーの動きもことなり、なれない役ではなかなか的確な行動がとれない。漁師の自由度が高くなったぶん、その弊害もおきているようであるが、ファナレイ村の漁師たちは、むかしのやり方よりもいまのほうがいいという。漁の手順は小さいころから父親のカヌーに同乗することによってたたくまこれ、自分ひとり漁に参加するようになってからも、くりかえし年長者から講義をうける。こうしてファナレイ村の男たちは有能なハンターとして成長していくのである。

そうこうするうちに黄色い太陽が昇った。あたりは一変してまぶしく光ります。ここから一番近いカヌーまでどのくらいの距離があるのだろうか。水平線近くに頼りなく浮かんでいる黒い粒がみえる。一八〇度見渡しても、せいぜいふたつのカヌーがやつとみつけられるだけで、あとはつかみ所のない海ばかりだ。バレはわたしにパドルを漕ぐ手を休めるようにいった。このあたりでわれわれはイルカを待つことにしよう。

洋上に漂うカヌーからでは何もわからないので、頭のなかで想像するよりほかにないが、大空からみれば、いまこの海域には二〇そう以上のゴマ粒ほどの孤独なカヌーがちらばっているはずだ。男たちはそれぞれのもち場で海をにらみつけながら、懸命にイルカを探しているだろう。そして半径一五キロメートルをこえるこの大きな海域のどこかにイルカの群れがはいりこんだ瞬間、イルカ発見の合図である「旗」が立てられるのだ。

しかし、いまのところその気配はまったくない。

バレは釣り糸を取りだした。年寄りの話によると、むかしはイルカ漁に専念したらしい

教師が学校にこない生徒をさしているのとおなじように、ファナレイ村の人は確信をもつてそう語る。

### 黒いゴマ粒以外、つかみどころのない海ばかり

東の空があかるくなる。あと一時間ほどで日が昇る。いまが一番いい時間だ。海の上の空はひんやりと冷たい。日が昇りはじめたら、またたくまにここは灼熱のるつぽに変わる。それまでのつかのまの幸せだ。あかるくなっ

てお互いのカヌーがみえるようになると、船団は散開しはじめた。互いのカヌーはぐんぐん離れていき、やがていくつかは視界から消える。後ろを振り返ると村が小さくみえる。ずいぶん沖に出たものだ。空が、微妙な青と赤と黄色のグラデーションでやわらかく塗られている。南洋の朝のはじまりは、いつみても美しい。もう陸から十数キロは離れたろうか。カヌーはイルカを探するために、二〇キロ以上の沖合にまで出かけていく。

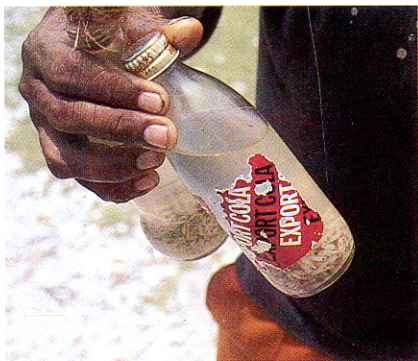
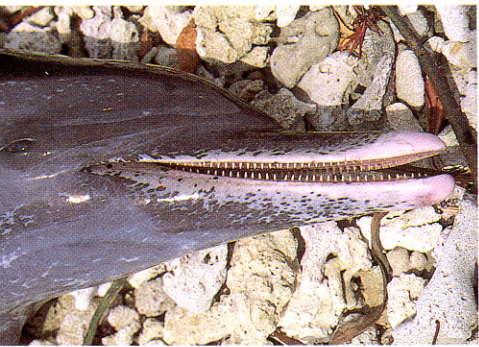
漁がはじまると全速力でイルカの群れを岸に追いこむので、足の遅い船が外洋側にいると取り残されてしまう。われわれのカヌーは、船が大きいことや漕ぎ手のかたわれの力不足もあり、比較的岸よりの場所にポジションを取ることにした。むかしのイルカ漁では各自の配置が厳格に決まっていたようだが、いまのファナレイ村では、イルカを探す場所はそれぞれの判断に任されている。疲れているときは岸の近くでイルカをさがせばいいし、元





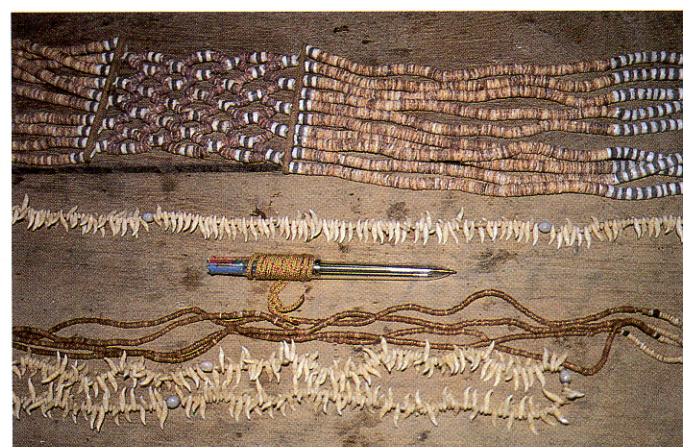
✓上からロボアウ (カズハゴンドウ)、ロボテテフェ (スジイルカ)、ウスブル (マダライルカ)、ラア (ハシナガイルカ) の歯。村の人びとのイルカの歯に対する審美眼は驚くほど鋭い  
 ↓頭飾り(ロダラ)。写真上のものにはロボアウの歯が使われている。ロボアウは最高の価値をもつイルカであるとされ、近年はほとんど捕獲されていない

↓上>マダライルカのくちばしには、およそ160本の同型の歯が並ぶ  
 ↓下>タロイモの葉にくるみ、ほんのすこし石焼きにする。こうすれば、簡単にアゴから歯をはずすことができる

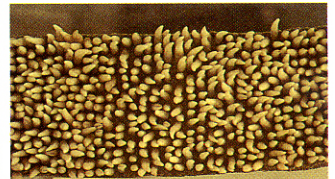


↑イルカの歯を数日水に漬け、よけいな肉を落としてきれいにする

→弓ぎりをつかって、イルカの歯のねもとに、ひとつずつ丁寧に穴をあける。この穴に糸をおしビーズのようにつなげていく



←マライタ島で原始貨幣として流通している貝貨とイルカの歯。1000本の歯をビーズ状につらねたものが交換の単位となっている  
 ↓イルカの歯がふんだんに使われている非常に貴重な頭飾り



Porpoise teeth collar bought from Daddley Kiriau Fouia village, North Malaita.



暑い暑い、灼熱の洋上で食べるスイカは、何もものにもかえがたい幸せだ。イルカ発見の旗はまだあがっていない

この時期、村の男は天気さえよければ日曜日を除いて毎日海に出る。平均すると週に五日はイルカ漁に出ている計算になる。今年（一九九三年）のイルカ漁がはじまってからさきようまで二八日たつており、そのうち漁に出たのが二〇日。さらにイルカがみつかったのは約半分の一日、しかし実際追いこみに成功したのはまだわずか四日にすぎない。

一年によって大きくちがうが、シーズン中、六〇日ほど漁に出て、そのうちイルカがとれるのは七回くらいである。炎天下にさらされてへとへとになりながら、手ぶらで村に帰ることのほうがずっとおおいのだ。すべての狩猟の基本は忍耐である。そして、イルカ漁もまたその例外ではない。実際この四日間、イルカは一頭もみつかっていない。忍耐にもやはり限界はある……。

このままイルカがみつからなければ、だいたい一二時ごろまでこうして海の上を漂い、村に戻る。消耗しきつていたらとカヌーを漕ぎながら帰ることになる。イルカを追いこむときには全速力で二時間ほどの村までの道のりが、こんな日には四時間ちかくかかってしまう。村にいたらもう夕方だ。けつして割のよい仕事ではない。

イルカがいけないときには何をしたらとてみつかからない。海に浮かんだ無力な人間はひたすらイルカを待つしかない。思考がしばしば停止する。釣り糸をにぎるバレの手もついで動かぬままである。また水を飲む。わたしはさつきからひとりで五回も水を飲んでいる。海の上では太陽から逃れられる場所はどこにもない。水を飲むとまた海に目をやる。いつのまにか一番近くのカヌーすらみえなくなった。孤独というのはそれだけでひとつの恐怖である。わたしはまだいい、バレという話し相手もいる、しかしほとんどのカヌーはひとりしか乗っていない。

汗と顔にかかった海水がまじりあい目のなかに流れこむ。こすってはいけなれない。思いながらも、あまりのかゆさについて手がでてしまう。一時間、二時間。海の上には何の変化もない。もってきたタロイモをかじって、渴いたのどに水を流しこむ。バレと無駄話をしながら時間をつぶすが、いったいいつまでこの状態がつづくのか皆目、見当がつかない。

このままイルカがみつからなければ、だいたい一二時ごろまでこうして海の上を漂い、村に戻る。消耗しきつていたらとカヌーを漕ぎながら帰ることになる。イルカを追いこむときには全速力で二時間ほどの村までの道のりが、こんな日には四時間ちかくかかってしまう。村にいたらもう夕方だ。けつして割のよい仕事ではない。

「ねえバレ……」  
沈黙に耐えられなくなったわたしが声をかけたとき、海をみていたバレがいった。「ボコ タケ ナ（旗が立ったぞ）」  
「えっ」  
「旗、立ってるぞろ？」  
「イルカ？」  
目を凝らしてバレが指差すほうをみつめるが、何もみえない。  
「この船の旗も立てて、パドルをいそいで」

カヌーがみえるのはせいぜい三キロメートルくらい範囲までだが、旗が立っていれば六キロメートル以上離れていてもみつけることができる。もともとは旗には非常に良い目と経験が必要だ。バレには旗がみえていても、わたしの目にはまったく何もうつらない。しかし、ともかくカヌーを進めるのが先決だ。どこかでイルカがみつかったらしい。最初にイルカを発見したカヌーは、そのイルカの群れの後ろ側にまわりこむと、旗を立ててイルカと伴走をはじめ。旗が立ったカヌーをみた別のカヌーは、つづいて自分のカヌーの旗を立てる。こうしてカヌーからカヌーへとリレー式にイルカ発見の情報が伝わり、人びとはイルカ漁の陣形を整える。時にはあまりにほかのカヌーから離れてしまっていて、このサインを見落とすこともある。イルカはかならずしも一番沖に出ているカヌーによって発見されるとはかぎらない。岸よりのカヌーが最初に旗を立てることもある。そんなときに沖にいる漁師が旗を見落とすと、かれは漁に参加できないまま置いてきぼりを食らう。旗をみついたら、自分の位置と全体のカヌーの散らばり、そしてどの方向で最初に旗を立てたカヌーをみたか、そのカヌーがどう動いているかを考えて、自分のつづべき位置に迅速に移動する。しかし、これがかたいへんなことなのだ。なにしろ陣形の全体像がみえてくるのは、ようやく追いつくのが最後の段階に達したときである。それまでは海の果てまで並んでみえる五つほどの旗とカヌーだけを目安に、自分のカヌーを進めていかななくてはならない。もちろんイルカの姿などみえるはずもない。

後ろにいるバレも力強く漕ぎながら舵をとる。しかしカヌーは、はじめに旗が立った

### 灼熱の世界で ひたすらイルカを待つのみ

太陽があがるとともに、どんどん暑くなる。さきようは風がまったくない。波が立たないのはありがたいが、それ以上にこの蒸し暑さには耐えられない。重たい空気がむわつと全身にのしかかる。暑い。暑い。朝早くからカヌーを漕いできたせいも、妙にけだるい。海の上にたゆたゆ浮かんでいるだけに、慣れない体に疲労がたまっていく。

イルカをみつようと、ずっと海面に目を凝らしているが何もみあたらない。旗も立っていないようだ。さらさら光る波がまぶしい。汗と顔にかかった海水がまじりあい目のなかに流れこむ。こすってはいけなれない。思いながらも、あまりのかゆさについて手がでてしまう。

「ねえバレ……」  
沈黙に耐えられなくなったわたしが声をかけたとき、海をみていたバレがいった。「ボコ タケ ナ（旗が立ったぞ）」  
「えっ」  
「旗、立ってるぞろ？」  
「イルカ？」  
目を凝らしてバレが指差すほうをみつめるが、何もみえない。  
「この船の旗も立てて、パドルをいそいで」

カヌーがみえるのはせいぜい三キロメートルくらい範囲までだが、旗が立っていれば六キロメートル以上離れていてもみつけることができる。もともとは旗には非常に良い目と経験が必要だ。バレには旗がみえていても、わたしの目にはまったく何もうつらない。しかし、ともかくカヌーを進めるのが先決だ。どこかでイルカがみつかったらしい。最初にイルカを発見したカヌーは、そのイルカの群れの後ろ側にまわりこむと、旗を立ててイルカと伴走をはじめ。旗が立ったカヌーをみた別のカヌーは、つづいて自分のカヌーの旗を立てる。こうしてカヌーからカヌーへとリレー式にイルカ発見の情報が伝わり、人びとはイルカ漁の陣形を整える。時にはあまりにほかのカヌーから離れてしまっていて、このサインを見落とすこともある。イルカはかならずしも一番沖に出ているカヌーによって発見されるとはかぎらない。岸よりのカヌーが最初に旗を立てることもある。そんなときに沖にいる漁師が旗を見落とすと、かれは漁に参加できないまま置いてきぼりを食らう。旗をみついたら、自分の位置と全体のカヌーの散らばり、そしてどの方向で最初に旗を立てたカヌーをみたか、そのカヌーがどう動いているかを考えて、自分のつづべき位置に迅速に移動する。しかし、これがかたいへんなことなのだ。なにしろ陣形の全体像がみえてくるのは、ようやく追いつくのが最後の段階に達したときである。それまでは海の果てまで並んでみえる五つほどの旗とカヌーだけを目安に、自分のカヌーを進めていかななくてはならない。もちろんイルカの姿などみえるはずもない。

ならしなく、イルカを追いこんでいく。マングローブの小湾は目の前だ



ときにバレが指したのとは、まったくちがう方向に進んでいる。まるで旗から遠ざかっていくようで不安になるが、バレは「これでいいのだ」という。しばらくすると、旗を立てた別のカヌーが水平線上にみえるようになってきた。だが、まだ自分が陣形のどのあたりの位置にいるのかはさっぱりわからない。比較的に岸に近いところだったので、端のほうのカヌーであることは確かだろう。とりあえずいわれたとおりに船を進めるだけだ。やがてバレが「止まれ」という。斜め前にみえる数本の旗まではまだずいぶん距離があ

る。しかしここがわれわれの定位置のようだ。斜め後ろにも遠く岸寄りにカヌーがついてきているのがわかる。イルカの追いかみの陣形はU字型をしている。ちょうどUの字の底に当たる部分にイルカがいて、そこから伸びる両翼でイルカの逃げ道を遮断しながら、上方に追いこむことになる。われわれはイルカを大きく取り囲む片方の翼の端にいるようだ。反対側にもU字のもうひとつの翼をになうカヌーが並んでいるはずだが、まだその方向には何もみえない。

イルカ漁の陣形と追いかみの俯瞰模式図は、四七ページに掲載

### 漆黒の巨大な石音の壁に驚き、逃げるイルカ群

そろそろイルカのあるあたりでは、陣の形が整ったと判断して、石を打ちはじめはするはずである。ソロモン諸島では石の音を使ってイルカを追いこむ。直径一五センチほどの固くて丸い石を両手にひとつずつもちながら、カヌーを傾けて海のなかで思い切り打ち鳴らす。激しくぶつけられた石は、水のなかでゴボゴボと大きな音をたてる。

イルカは音の反射を利用したエコロケーションという方法で、情報伝達や状況判断をしている。脳の聴覚部位が非常に発達しているイルカは、ちょうどわれわれ人間が視覚によってモノをみるように、音によって外部を認識しているといわれている。海のなかで鳴り響く石の音は、イルカたちにとって、いったいどんなふう「みえている」のだろう。海のなかに突然あらわれたのは、漆黒の巨大な石音の壁である。驚いたイルカたちは、この壁の実態を把握する余裕すらなく、音の壁をさけてひたすら逃げはじめ。こうなってしまうと、イルカたちにとって音の鳴るカヌーの下を潜り反対側に抜けたずのは、不可

能にちかい。網もロープも使わずに、広く深い海でイルカの群れを追いかむことができるのは、ひとえにこの技術のおかげだ。

群れが移動するのを見ると、男たちは石を打つのをやめ、イルカを追走しながら村の方向にカヌーを進める。U字型を保ったままイルカの群れを囲みながら、すべてのカヌーが移動する。やがてどこかのカヌーの近くにイルカが近づくと、今度はそのあたりのカヌーが石を打ち鳴らす。まるでサッカーボールをパスしながらゴールに向かって進むように、船団はイルカの群れをパスしながら村の近くの入り江に向かって進んでいく。

少しずつ陣が動きはじめているのがみえてきた。外洋側では追いかみがつづいている。どこかでイルカが海面に浮かびあがったのだろうか。ときおり遠くで歓声が聞こえる。海の上では驚くほど音がよくとおる。声が海面を走るのだ。陣の形を崩さないようにわれわれのカヌーも移動する。

そろそろ村の人も水平線上に旗が並んでいるのに気がついて大騒ぎしているはずだ。「むかしは小学校がなかったから、子どもたちはみんなヤシの木に登って一日じゅう海をみているものだ」と、村びとが話していたのを思い出します。

しばらく岸のほうに向かって漕ぐうちに、やがてはるか後方に何ぞうものカヌーが並びながら近づいてくるのがみえた。陣の中心部である。前よりはつきりと歓声が聞こえてくる。ここからはまだイルカはみえないが、あの船団のあたりではイルカが跳ねているはずだ。海の上では歓声がやまない。獲物がないまま帰る日は天と地ほどのちがいである。船を漕ぐ手にも力がみえなくなる。この瞬間、さほどまでの疲れがすべて消し飛んでいる。狩猟はこれだからやめられない。いま、わた

しのなかを流れているこの不思議な力は、人類がもちつづけてきた一〇〇万年の血の興奮だろうか。いいぞ、いいぞ、ひとりうなずく。いやいやまだ漁が終わったわけではない。これからがたいへんなのだ。

わたしとバレは沖のカヌーを誘うように村に向かって進んでいく。イルカの群れはUの字形のカヌーの船団のあいだを行きつ戻りつしながらも、やがて岸のほうへ運ばれていく。だが遠くにみえる村はなかなか大きくならぬ。本当にちゃんと進んでいるのだろうか。疑ってみたいもなる。もしかしたら潮流に押し戻されているのではなからうか。

しかしカヌーを漕ぐ男たちは、わたしの疑問などまったく気にもかけていないかのよう、ひたすら海の上を進んでいく。イルカさえここにいればよいのだ。

「イルカがきた」とつぜんバレが叫ぶ。ずいぶん距離はあるが、黒い背びれがいくつも海面に並んでいるのがみえる。イルカたちは海面を縫うようにこちらに向かって跳んでくる。「石を打て」バレが叫ぶ。隣のカヌーが石を打ちはじめ。イルカはそろって向きを変え。大きな群れだ。

「一〇〇頭？」わたしがたずねる。「二〇〇以上」バレが答える。うれしい。うれしい。

石の音に気づいたイルカは、陣形の中心部に戻っていき、ふたたびみえなくなる。

石を打つのをやめ、さらにカヌーを進める。

### 追いはじめて二時間、急に大きくなる村の風景

イルカを追いはじめてからそろそろ二時間近くたったろうか。急に大きくなりはじめた村の風景は、一気に目の前に迫ってきた。浜で大喜びしている人びとの姿もみえる。村から応援のカヌーも駆けつけてくる。ようやく陣





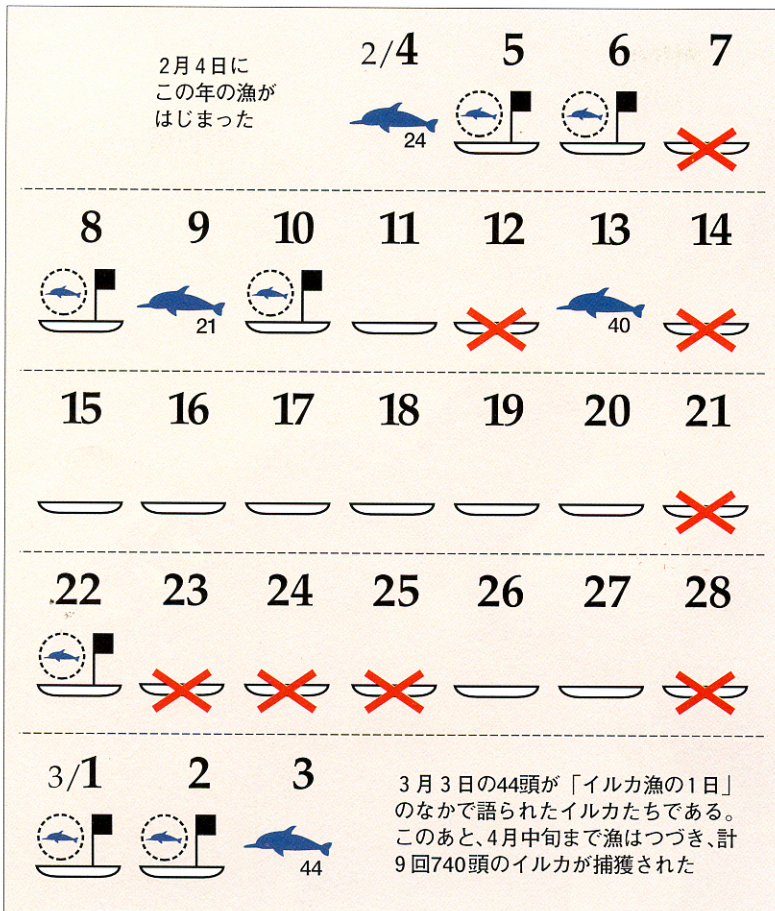
20キロ沖の海から連れてきたイルカの姿があらわれた。「飛びこめ！」の合図のもと、男たちはみな海に飛びこむ。イルカによりそうように近づき、イルカを抱きかかえる。そして、カヌーの近くまで誘導してきたイルカを、一気にごぼう抜きする







1993年の出漁概況 (3月3日まで)



頭数  
 イルカの追いこみに成功した  
 発見したが追いこみに失敗した  
 出漁したがイルカを発見できなかった  
 出漁しなかった

形の全貌が海上にみえてきた。旗を立てて海の上に並んだカヌーの列は壮観だ。「アリフオー(石を打て)」叫ぶ。イルカの近くにいた船がいつせいに石を打ち鳴らす。カヌーを海面ぎりぎりに傾け、力いっぱい石を打つ。イルカが走る。そして潜る。一〇秒二〇秒、どこに潜ったかわからない。しかし今度はイルカが向かった対面のカヌーが石を打ち鳴らす。人びとは海をみつめる。やがて、はりつめた時が一分をすぎたころ、イルカの群れが海面にあらわれる。歓声があがる。たくさんの人の声が混ざりあい、異様な音になって耳にびんびん響く。イルカが海面にあらわれると、石を打つのをやめてイルカを追う。イルカがふたたび潜る。石を打つ。潜ったイルカは追いこみの陣

の外には出られない。船団はイルカの群れをかこんだまま波をこえていく。「ラアだ」バレーという。ラアとは、日本ではハシナカイルカとよばれている小型のイルカだ。村でおもにとられているイルカはラアとウヌブル(マダライルカ)の二種である。かつてはロボアウというイルカがたくさんいたというが、ロボアウをとったことのある者はもう村にはひとりも生きていない。最高の価値の歯をもつといわれるロボアウはすでに伝説のイルカだ。だがいまでも何軒かの家で、ロボアウの歯をつくられた装飾品が代々伝えられ、大切に保存されている。ロボアウの歯はラアやウヌブルにくらべて大きく立派だ。その歯から同定すると、ロボアウはカズハゴンドウというイルカであ

ったと考えられる。しかし、カズハゴンドウ自体まれな種で、その生態はほとんどわかっていない。「むかしはこのロボアウの歯を二〇本やるくらい、人を殺す奴もいたのだ」村の古老はそういつて笑った。現在、貨幣の代用品として流通しているラアとウヌブルの歯は、一本で四〇ソロモンドル(約二〇円)の価値をもつ。フアナレイ村民が使うラウ語で、イルカは総称してキリオとよばれる。さらにキリオは種に応じて数種類に分類されている。フアナレイ村民のイルカに対する知識は深い。たとえば、イルカの群れの構成や状態にもさまざまな名称がついている。これらはけっして言葉の上だけの「死んだ」知識ではない。追いこみの際には、実際にこうした知識を背景に、群れの状態をみきわめながら、人びとは的確にイルカを誘導していくのである。

**入り江直前、イルカが潜る**  
 一分経過、二分経過……

キリオはフアナレイ村の若者たちがつくるサツカーチームの愛称でもある。フアナレイ村民は周辺の村びとから「ワネ・キリオ(イルカの民)」とよばれることに、大きな誇りをもっている。男たちが集まってイルカを語りはじめれば、いつまでも話がつきることはない。たとえば水族館などでおなじみのハンドウイルカは、石で追っても逃げない、逃げないどころかカヌーに寄ってくるので、けっして追いこむことのできない、やっかいなイルカだという。村の人のいい方を借りれば「大バカ者」である。

ラアもわりに追いこみが難しいイルカである。特に子どもたちの混ざった群れではなかなか思いどおりにならない。きょうの群れも入り江の直前で躊躇しはじめた。ここが漁の最大の難関のひとつである。カヌーで外洋側を取

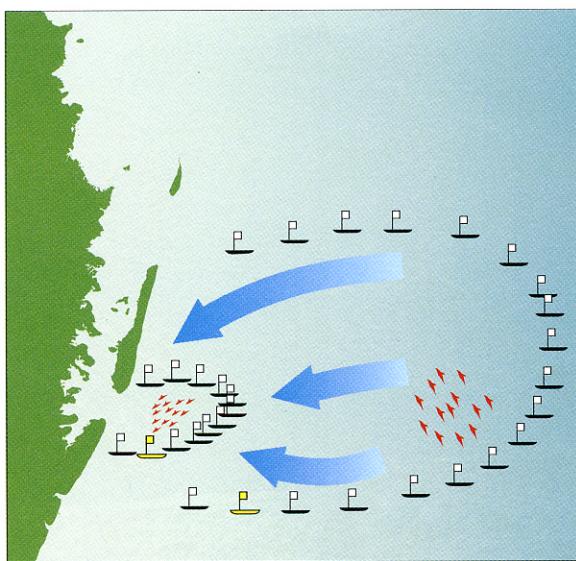
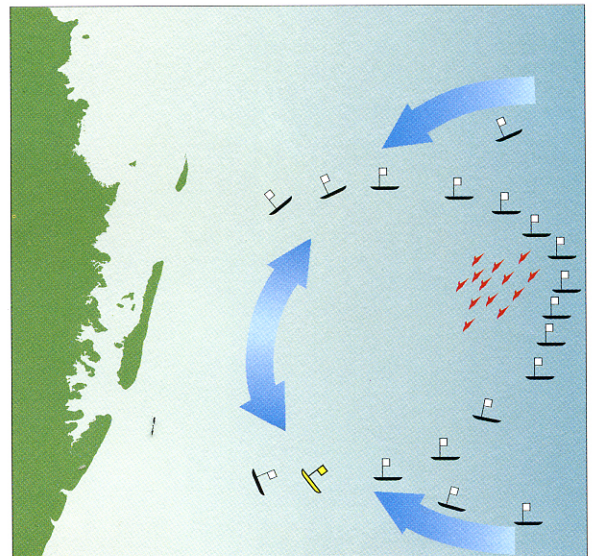
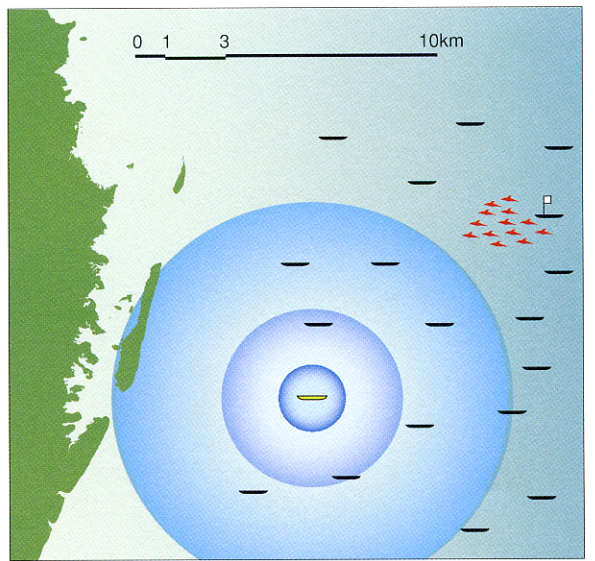
り囲み、イルカを入り江に追いこもうとするのだが、うまくいかない。もう村は目の前である。波が砕ける音と浅くなつていく海底の地形から、イルカたちは岸が近づいたことに気づき警戒しているのだから。イルカの黒いひれが海面で弧を描いて旋回する。群れがどこかのカヌーに近づいたに石が打ち鳴らされる。「ラアよ、おまえの行くべきところはひとつしかない」石の音は断固としてイルカたちをつきはなす。またイルカが潜った、今度は長い。イルカの潜った先のカヌーが石を打つが、イルカはあらわれない。一分……二分。いけない。男たちが叫ぶ「全員で石を打て」長く潜ったイルカはどこに向かっているのかわからない。そういうときはとにかく全員で音をだすのだ。右翼の一部のカヌーはまだ気づいていない。「ぞっちのカヌーも、石を打て！」バレーも叫ぶ。遅れた。あわててカヌーを傾けて石を打ち始める対面の男たち。ゴボゴボ、海が音を立て泡立つ。イルカが陣から外に出たら手がつけられない。ここまできて……

「逃げた」  
 黒いイルカが勢いよく大洋を跳ねていく。石を打つのが少し遅れた右翼のカヌーの後ろだ。

ああ、全身の力が抜けていく。イルカたちが逃げていく。「ラアは少しバカなやつだからな、よくへんなほうに逃げるんで困ったもんだ」前に誰かがそう話していたっけ。やりきれない。

「石を打て」  
 「まだいるぞ」近くのカヌーからそんな声が聞こえた。逃げたのは一部だけだったようだ。たしか





### イルカを追いこむ手順

早朝に外洋にてカヌーは、散開してイルカの群れを探す。海上に浮かぶカヌーからの視野は非常にかぎられており、図ではすぐ隣に位置するカヌーも、実際には水平線上に黒いゴマ粒のように頼りなくみえる程度である。図の3つの同心円のうち、一番内側は、わたしの乗るカヌーからイルカの群れを確認できる範囲。次の同心円は、旗をあげていないカヌーがみえる範囲。イルカ発見の旗が立つと視野はぐんとひろくなり、一番外側の円の範囲のはいつているカヌーまで確認できるようになる。

旗の合図はリレー式にすべてのカヌーに伝えられ、それぞれのカヌーは追いこみの陣形を整えるために移動を開始する。たとえば図で比較的陸に近い位置にいるわたしのカヌーは、陣形の片翼を形成するように岸に平行に船を進める。

陣形が完成すると水中で石を打ちならし、追いこみが開始される。群れは、ちょうどサッカーのボールのようにカヌーのあいだをパスされながら、時間をかけてファナレイ村のある入り江に誘導される。

46ページとも原図・竹川大介

に陣のなかにもイルカがみえる。よかった。よかった。よかったよう。わたしの感情はもうめろめろだ。ふたたび石の音を張りイルカを追う。行きどころなくぐるぐる回っていたイルカがまた潜りだした。今度も長い。

音がするところには、じつは何もないことを見抜かれたのだろうか。一瞬の不安がよぎる。みな石を打ち。バレも強く石を打つために、カヌーを思い切り傾けている。わたしはパドルでバランスをとりながらカヌーをささえる。

### マンガローブ林の泥の海でイルカをやさしく抱く

急に陸のほうから歓声がおこった。海中に潜ったイルカは、ついに入り江のなかに浮上した。「よし」

カヌーは一団になって入り江にはいっていき、凱旋だ。裏声でだす甲高いエールが村からいくつも沸きあがる。たしかにイルカ漁は特別な漁だ。ほかの漁のような生活感が妙に希薄なのだ。ずっとむかしはいとちがって、一年に一度だけしかイルカ漁に出なかつたのだという。イルカ漁は生業活動というよりも祭りである。大歓声のなかをイルカを追ってカヌーは進む。男たちの顔がみえる。強い太陽の光にほてった顔はどれも誇らしげだ。わたしもなんだか大きな気分だ。よし、よし。女たちがカヌーをだして入り江の別の出口を閉じている。こうなると、イルカの群れはマンガローブの林が密集する小湾のなかにはいつていくしかない。

外洋ですつと我慢していたのだろう、ほかのカヌーにタバコを求めている人もいる。いままではそれどころではなかつた。もう大丈夫だ。村からの援軍を含めて、総勢四〇そうほどのカヌーが、幾重にもイルカのまわりを囲んでいる。ほんの十数メートル先をイルカが右往左往する。

「みる、イルカは死んだ」隣のカヌーが近づいてきて、なかの男が笑いかける。喜びに満ちた声が飛びかう。マンガローブの小湾まであとわずかだ。干潮でイルカがどろいても奥に行きたがらないときは網を使つて追い立てることもあるが、さよとはどうやら素直に行つてくれるらしい。カヌーの輪が閉じられていく。イルカの群れがいる場所では泥が舞いあがり海が黒く濁っている。クラ

イマックスは近づいた。突然、視界を失つたイルカの群れが潜ろうとして泥のなかに頭を突っこむ。イルカの尾が空しく海面に跳ねる。

「飛びこめー」みな叫ぶ。叫ぶと同時にカヌーから飛びおろる。しぶきがあがる。マンガローブ林の泥の海だ。イルカを抱いてつかまえるのだ。バレも行く。わたしも行く。

海をなでみるイルカは想像以上に大きい。泳ぎながらイルカたちによりそうように近づいていく。イルカを抱くときはけつしてしっぽをもつてはいけない。かならず頭のところまで泳ぎ、くちばしをにぎる。強くにぎってはいけない、やさしくにぎるのだ。やさしくにぎって、もう片方の手をそつとイルカの腰のところにまわす。そのままイルカの泳ぎたように泳がせて、ときどきくちばしをカヌーに向ける。こうしてイルカがカヌーに近づくと、あとはカヌーの上に乗る人がゴボウ抜き。これがコツである。

この興奮を語りえる言葉をわたしは知らない。なにしろ海をなでイルカを抱くのである。はじめは少しプブリイやがたりもするけれど、やさしくしたらちよつとおとなしくなつて、やわらかいからだを抱いて、そうして、いつしよに泳いで、ずうつと泳いで、カヌーまで連れてきて、つかまえちゃうのである。

### 熱っぽくイルカを語り、イルカとともに生きる

二〇キロ沖の海から連れてきたイルカたちがここにいます。イルカ漁の興奮を無邪気に肯定するつもりはないが、それを頭から無視してイルカ漁を語ることはできないだろう。もしも、イルカ漁を残酷だと思っている人がいたら、生きるということとイルカをとるということが、ほとんどおなじ意味をもつファナレ



→解体されたイルカの肉は世帯ごとに平等に分配される。海岸にファナレイ村の世帯数だけ肉の山がつくられる

イ村の生活を考えてほしい。

これはけっして比喩的な意味ではなく、実際に村びとたちはイルカをとらえ、そしてそれを食べることよって生きているのだ。人びとはイルカが憎くて殺しているのではない、それどころかイルカが大好きなのである。だからイルカが村にやってくれば大歓迎をあげてみなで迎える。イルカを語るときは村びとの熱のこもった口調は、けっしてかりものではない。

われわれは、ふだん自分たちが食べているブタやウシにこれほどの思いをもつことができないだろうか。イルカたちがつきつきとらえられていく風景を前に、わたしの言葉はいかにも脆弱である。しかしあえていおう、生と死の世界を隔絶し、もはやぬるま湯のような感覚のなかでしか生活できないわれわれが失ったものは、公然とした明らかななかにある死の姿なのである。

すべてのイルカがカヌーに乗せられたようだ。イルカを満載したカヌーが意気揚々と村に引き返していく。そろそろ三時だ。村に戻るとイルカたちは浜に横たえられる。陸にあげられたイルカはまるつきり無力である。ファナレイ村の人びとはイルカを魚の仲間に分類しているが、たしかに体を陸に横たえたイルカの姿は、いやしくもケモノのたぐいのと

べき態度ではない。口を開けて息をしようとか、とりあえず海まで歩いて逃げようとか、そういう努力のかけらもみせず、ぜんまいじかけのような尾びれだけがばたばた動く。

漁が終わると男たちは寄合小屋でイルカの分配を決める。きょうとれたイルカは四四頭であった。結局ほとんどのイルカが村を目前にして大海に戻ってしまったようだ。歯の分配は漁に出た者と出なかった者となるが、肉はそれぞれの家に平等にわけられる。イル



↑上↑イルカの肉は奥にみえる石焼き場でじっくりと焼かれる。何度も石焼きした肉は柔らかくなり、保存性も増す  
↑下↓熱せられた石のなかにイルカの肉を入れ、それをバナナの葉などでおおって、石焼きがおこなわれる。伝統的に鍋などの調理器具をもたなかったオセアニアの島々では、さまざまな石焼きの技術が発達している

カの解体はきょうじゅうにおこなわなければならない。あすには、イルカがとれたというわさを聞きつけて、山に住む人びとが肉を求めてやってくるはずだ。

肉を調理して、ほかの村の人に売るのは女の仕事だ。女たちが忙しくなるのはこれからである。ひさしぶりに石焼きにされた肉のおいが小さな村のなかをただよう。あすは海に出ないが、あさってからまたイルカを探す日々がつづく。男たちは疲れた体を休めるためにそれぞれの家に戻っていく。

参考文献

拙稿「ソロモン諸島のイルカ漁—イルカの群を石の音で追込む漁撈技術—動物考古学」第四号 動物考古学研究会 一九九五  
拙稿「イルカが来る村—ソロモン諸島—秋道智彌編「イルカとナマコと海人たち—熱帯の漁撈文化誌」所収 NHKブックス 一九九五



←マングローブの林を抜け、ローカルマーケットに向かう。山にすむ焼畑農耕民たちが、イモやバナナをもって、イルカや魚を待っている  
↓ローカルマーケットでの交易は女の仕事である。こうしたマーケットは週に1度定期的に開かれるが、イルカが大量に捕獲されたときは、臨時の市が立つこともある



→繊維状にほぐれたイルカの肉。ちょうどビーフジャーキーのような味わいて、とてもおいしい